

家庭・社会における実践力の育成をめざした技術・家庭科教育

—今の私にできること—

技術家庭科 松山 育久 西山 眞美

1. 主題設定の理由

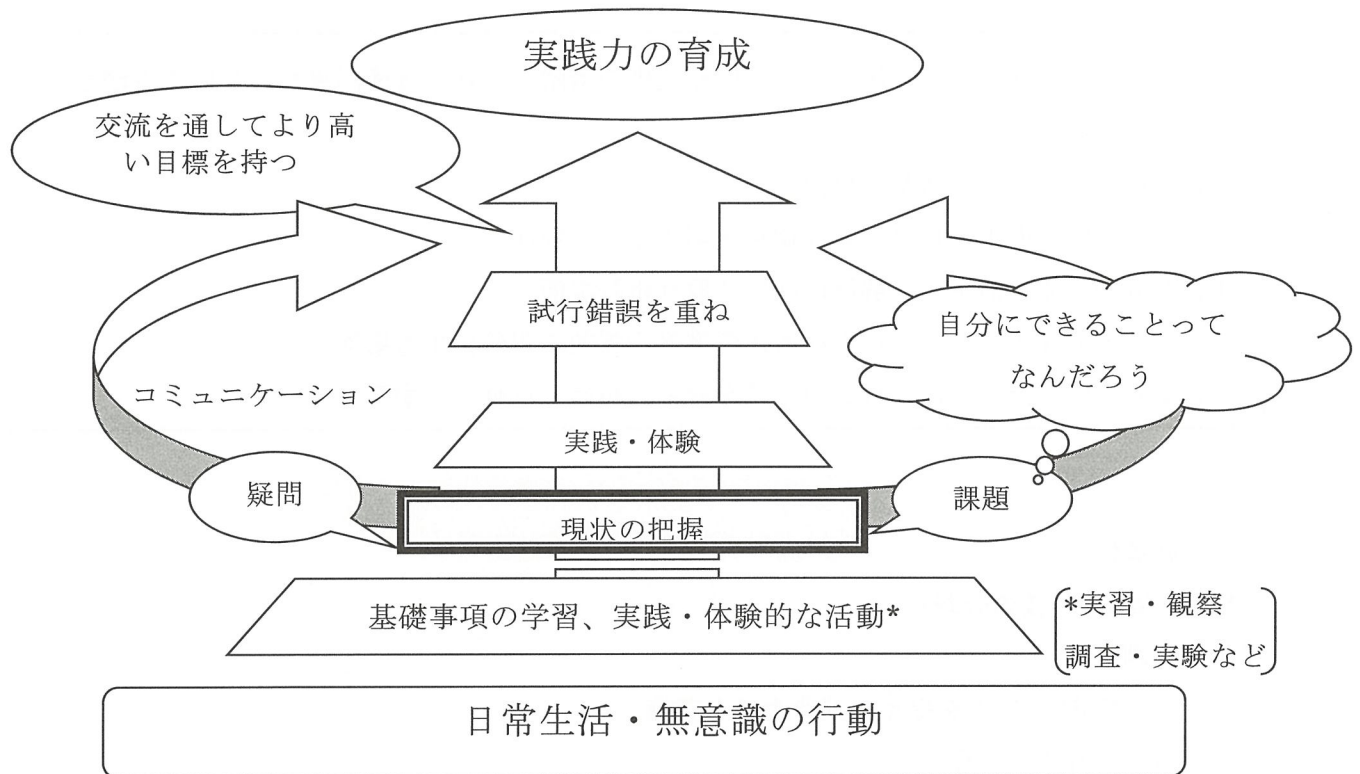
学校における家庭科、技術・家庭科の学習は、単に生活の技能を習得するだけではなく、自分自身が家族や社会を構成する一員であり消費者であることを自覚・再認識させ、これまでの経験や気づきをもとに意欲的に取り組む態度を育むことが重要である。現状を把握し、今の自分にできることを考え、解決に向け行動していこうとする実践力の育成は、将来に向けたよりよい生活への見通しを持つことでもあり、自らの生活の中での自己実現へと向かっていくと考えられる。具体的には、技術分野では、ものづくりを支える能力を高め、よりよい生活を築くために、技術を適切に評価し活用できる能力と実践的な態度を育成すること、家庭分野では、自己と家庭、家庭と社会のつながりを重視し、生涯の見通しを持って、よりよい生活を送るための能力、実践的な態度を育成することといえるだろう。

しかし、このようなねらいをもった技術・家庭科の学びが実生活に十分生かされていない生徒の姿を目にすることがある。刻々と変化する社会においては、主体的に対応する中で生じた課題に対し、様々な角度から働きかける思考力、判断力、想像力、そして表現力が必要とされるが、一方で、大量生産・大量消費という効率が求められ、膨大な情報が溢れる中で、主体的に生活しなくても日々の日常生活を送ることができるという現実もある。技術・家庭科の学習は、学校の授業だけで完結するものではなく、生活での実践こそが原点であり、到達点である。だからこそ、授業での学習活動が、家庭での実践へとつながるような題材の取り扱い方が重要であると考えられる。

また、中学生は家庭生活のみならず社会の一員としての自覚を持って、自立した生活を送るために必要な知識を深め、技能の定着を図る時期となる。小学校での家庭科の学習を経て、この時期に技術・家庭科を学習する意義は、自分たちの生活を支える技術の重要性を認識させることにより、生活の課題の発見や解決策をより多角的・多面的に捉え、新たな視野を獲得して自らの生活へと立ち返っていくことであると考えられる。そこで、教科としても技術分野、家庭分野の関連を意識しながら、今ある技術を適切に評価して効果的に活用し、生活にいかす工夫や、実践を重ねることで自らの生活をよりよくすることが、社会生活の課題解決へとつながっていることに気付かせ、高等学校での学習や、将来のよりよい生活のための実践へとつなげていきたい。

課題を見つけ解決策を模索し、自立していく過程においては、自分以外の考えを聞いたり、互いに試したりする協同の活動が不可欠であり、また、言語を媒体とするのみならず、作品や製作物、ものを作る場合の設計図などをおして、交流は深まる。その場を共有し、互いに感じる感性を出し合う中で、自分とは異なる価値観を知り、より高い次元へと成長する過程を本校技術・家庭科では大切にしたいと考える。

技術・家庭科での「家庭・社会生活における実践力」の育成に関する学習モデル図】



2. 実践の概要

家庭・社会での実践力の育成をめざして、本校の技術・家庭科が求める生徒像とは具体的にどのようなものなのか。中学校の発達段階に応じたわれわれの考える身に付けさせたい力をもとに示すと、以下の6項目なる。

技術・家庭科がめざす生徒像

- 1】生活を支える技術の重要性を認識し、適切に評価する目と自立に向けた知識や技能が身についている
- 2】新しい技術や実生活、社会生活の現状や問題点を発見できる
- 3】自己の生活を見つめ、家庭生活や社会生活との関連を意識しながら、そこから生まれる課題を発見し分析できる
- 4】課題解決に向け、基礎・基本となる知識や技能を持ち様々な視点から解決法を提案できる
- 5】互いにアイデアを出し合いながら、他者とのかかわりを大切に課題解決に向かう態度が身についている
- 6】実生活の事物・自称を新たな見方や考え方でとらえ、よりよい生活の創造に向け主体的に取り組める

また、我々がめざす生徒を育成していくためには学習場面に以下のような学習活動を積極的に組み入れることが必要であると考え。これらの6項目について、各授業の場面にできるだけ多く取り入れたものを実践していくことが大切であると考え。

学習における場面設定

- 1】身の回りや社会生活で用いられている技術の素晴らしさ、技術が果たしている役割を感じる場面
- 2】実践的・体験的な活動の場面
- 3】様々な問題の中から自らの課題を適切に見出す場面
- 4】知識や技能を活用し、解決に向けて取り組む場面
- 5】他者との交流により、新たな考えの構築や課題を明確化する場面
- 6】よりよい生活に向け、自分の意見を持ち、発信し行動する場面

3. 実践事例

○技術・家庭科(技術分野)

①単元(題材)

ESDの視点を捉えた消費生活と環境

②単元設定の理由と目標

理由

今日、ものづくり技術の進歩は、さまざまな製品を生み出し、生活を豊かにしてきた。資源やエネルギーの大量消費によって豊かさを得る一方で、資源の枯渇や環境汚染など、地球規模で取り組む問題と向き合わなければいけない中で生徒らは生活している。使い捨てをやめたり、資源を有効活用したり、廃棄の方法を考えたり、廃棄物を資源として有効活用したりする循環型社会を視野に入れた考え方が求められている。

そこで本単元では、ESD (Education for Sustainable Development) の視点を捉えた授業を進めていく。ESDの目標は、「すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動があらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすこと」とされている。

本単元の学習を通し、世の中にある「技術」に関心を持たせ、知識の習得を通して技術の仕組みや社会に与える影響を学習し、技術は問題解決の道具であり、持続可能な発展を支え、社会を豊かにすることに気づかせ、持続可能な社会づくりにむけての課題を見だし、それらを解決するために必要な能力・態度を身につけてさせたい。

目標

- ・技術の発達と、社会の変化や環境問題との関わりを考える。
- ・身の回りにある技術の長所と短所を判断し、自分の将来や生き方への活用の仕方を考える。

③指導計画（全4時間）

- 第1次 わたしたちの生活と環境との関わり 1時間
- 第2次 情報に関する技術と私たちの生活 1時間
- 第3次 テクノロジーアセスメント 1時間
- 第4次 情報の技術とわたしたちの未来 1時間

④単元評価基準

生活や技術への 関心・意欲・態度	生活を 工夫し創造する能力	生活への技能	生活や技術についての 知識・理解
技術の課題を進んで見つけ、社会的、環境的及び経済的側面などから比較・検討しようとするとともに、適切な解決策を示そうとしている。	技術の課題を明確にし、社会的、環境的及び経済的側面などから比較・検討するとともに、適切な解決策を見いだしている。	学習した知識と技術をもとに、製品を適切に評価することができる。	技術が社会や環境に果たしている役割と影響について理解している。

⑤指導内容や方法、教材、教具

第1次：わたしたちの生活と環境との関わり

本単元の導入として、1992年リオデジャネイロで開催された環境サミットでのセヴァン＝スズキさんのスピーチから環境問題について考えを深め、自らの課題として捉え、持続可能な社会づくりの形成のために自らの生活を見直し問題解決へと喚起させる時間とした。

第2次：情報に関する技術と私たちの生活

情報に関する技術のひとつであるスマホ・携帯電話が生産から廃棄のことまで考え、社会や環境、経済に果たしている役割と影響についてプラス面とマイナス面に分けて考える。

3年級用紙

技術を未来に生かそう (月 日)

3年 組 番 氏名 ()

技術の進歩により、私たちの生活は豊かになってきたが・・・
地球で今叫ばれている環境問題 (課題、課題も含めて考えて下さい)

()

今求められている考え.....

○実際に挙げて、3つの社会状況が生まれる () () ()

○今ある技術を正しく評価していく。(プラス面・マイナス面)
国産の原料の採取から製造、流通、使用、廃棄をあらゆる段階における環境への影響の
まとめ及び評価のことも ()

よりかえり (持続可能な社会を実現するために、どのようなことを考えたいかを書きましょう)

はい

その理由

2年 組 番 氏名

携帯電話について

① 携帯電話はなぜ必要?

()

② どんな機能がありますか?

()

③ なぜこんなに数が増えているのか?

()

④ 携帯電話が普及、発達することによってどういった変化をもたらしましたか?

()

()

()

()

よりかえり

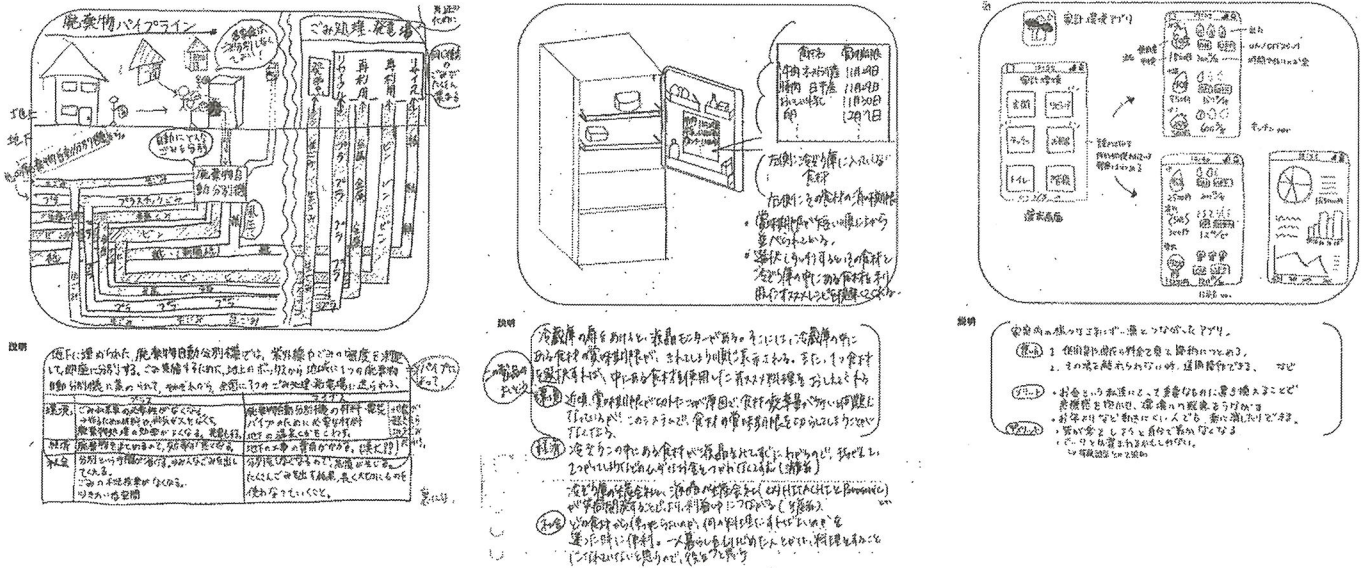
第3次：テクノロジーアセスメント

情報に関する技術の社会や環境に関する課題を取り上げ、その解決策を社会、環境、経済などの側面から比較検討を行った。技術の果たす役割やその影響を評価していく考え方を基にし、持続可能な社会を築くために必要な“情報に関する技術を持つ商品”を構想した。

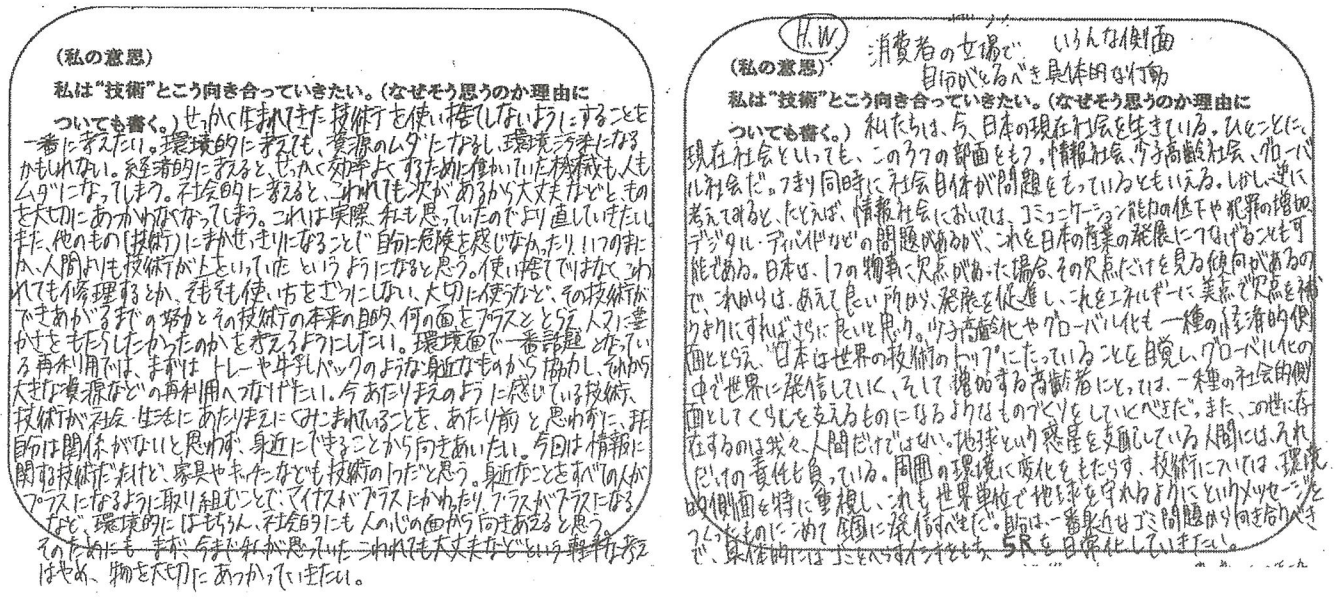
第4次：情報の技術とわたしたちの未来

生徒自ら考えた商品を意見交流しあい、これからの未来に向けて、持続可能な社会を築くために技術の果たす役割や影響を評価した上で、技術とどのように向き合うのかについて自分の意思を述べた。

生徒が提案した情報を活用した商品



生徒が考えたこれからの技術の向き合いかた



⑥成果と課題

技術分野の学習の最終段階として、技術の多様性や社会や環境との関連性を踏まえた適切な評価とともに、今後の社会の中での適切な技術の活用方法について深く考える姿を見ることができた。

今後は3年間を見通した指導計画を作成し、段階的に ESD に関する構成概念や能力・態度の習得・育成を図っていきたい。

○技術・家庭科(家庭分野)

①単元 (題材)

幼児の生活と遊び

～幼児にふさわしい手作りおもちゃを作ろう～

②単元設定の理由と目標

理由

最近の親は、幼児が自分の思いどおりにならないと、虐待したり、あやめたりするニュースを聞くと胸が痛くなることがある。また、日本における生徒を取り巻く家庭環境が大きく変わり、核家族がどんどん増え、そのため、家族構成の人数や兄弟の数も減り、身近に幼児と接する機会が少なくなっている。その結果、幼児に対して関心が薄かったり、イメージでうっとうしいと思ったり、どう接すれば良いのかわからなかったりする生徒が多い。そこで、幼児とのふれあいを通して、幼児の発達段階や特徴を理解し、製作した遊び道具が年齢にふさわしいものかをあらゆる角度から考え、手作りの遊び道具を作ることによって、幼児の生活における遊び道具の大切さについて気づかせたい。これを作ることにより、自分が今まで成長してきた生活をふり返り、今後の自分の生き方を考えるきっかけにしたい。

目標

- ・遊び道具の製作を通して、幼児について理解を深める。
- ・幼児の年齢や発達の特徴を考えて、身の回りの物の材料にして幼児が喜ぶ遊び道具を作る。

③指導計画(全8時間)

第1次 幼児の体の発達

第2次 幼児の心の発達

第3次 幼児の遊びと発達

第4次 幼児遊びを支える

第5次 幼児と遊ぶおもちゃ作り

おもちゃ作りの計画

第6次 幼児と遊ぶおもちゃ作り

おもちゃの図案を考える

第7次 幼児と遊ぶおもちゃ作り

おもちゃ作り(夏休みの宿題)

第8次 幼児と遊ぶおもちゃ作り

おもちゃを展示し、投票と理由

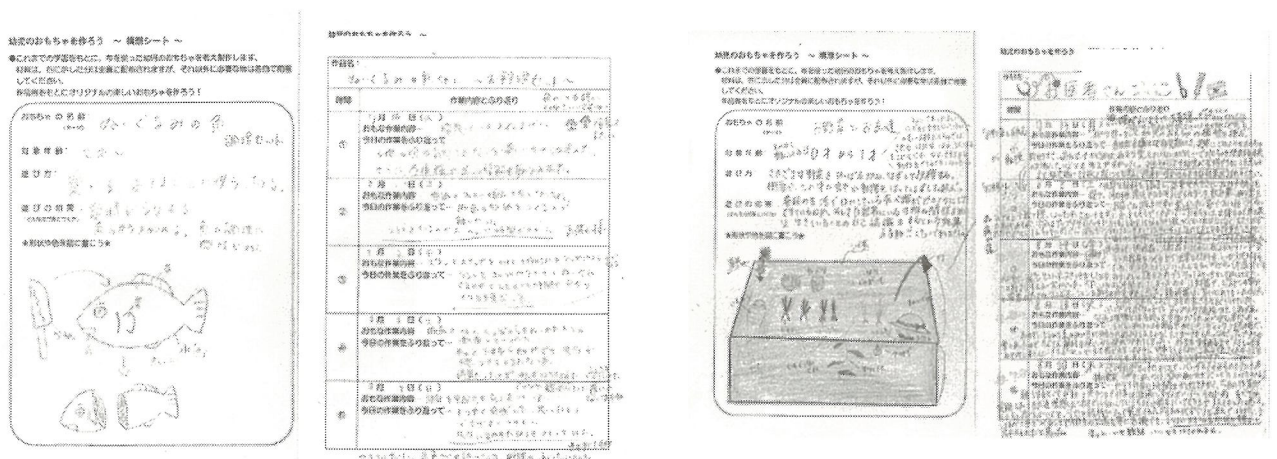
④単元評価規準

生活や技術への 関心・意欲・態度	生活を 工夫し創造する力	生活の技能	生活や技術について の知識・理解
<p>・幼児の遊び道具の製作などの活動を通して、幼児に関心を持つようとしている。</p> <p>・家族又は幼児の生活をよりよくすることに関心をもち、課題を主体的に捉え、製作や幼児と触れ合う活動などの計画と実践に取り組もうとしている。</p>	<p>・幼児の心身の発達に応じた遊びや遊び道具、遊び方について考え、工夫している。</p> <p>・幼児の生活について課題を見つけ、その解決を目指して製作や幼児と触れ合う活動など計画を自分なりに工夫している。</p>	<p>・幼児の遊び道具製作は、幼児についての理解を深めることができる。</p> <p>・幼児の心身の発達を踏まえ、幼児が興味をもって楽しく遊べるものとなるように考えることができる。</p> <p>・遊び道具を製作する際には、安全への配慮について十分考え計画を立てることができる。</p>	<p>・幼児の心身の発達の特徴について理解している。</p> <p>・幼児の発達を支える家族の役割について理解している。</p> <p>・幼児にとっての遊びの意義について理解している。</p>

⑤指導内容や方法、教材、教具

第5次 おもちゃ作りの計画

- ・第1次から第4次にかけて学習活動から見えてきた課題に、幼児が成長していく上で生活に必要なおもちゃを考える。ワークシートに幼児が対象なので、危険でなく、口に入れても大丈夫なものを各自考え、対象年齢・遊びの効果も考え、企画を考え、計画を進めていた。

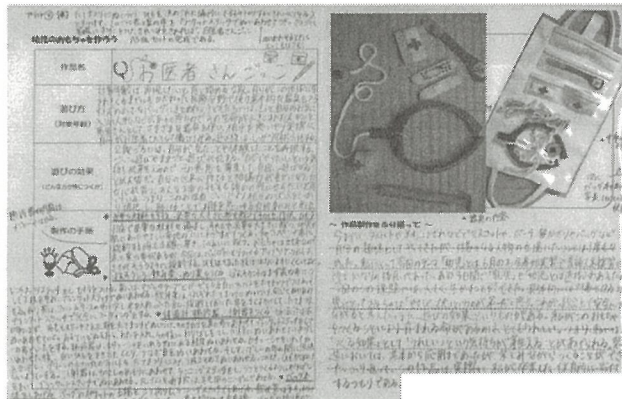
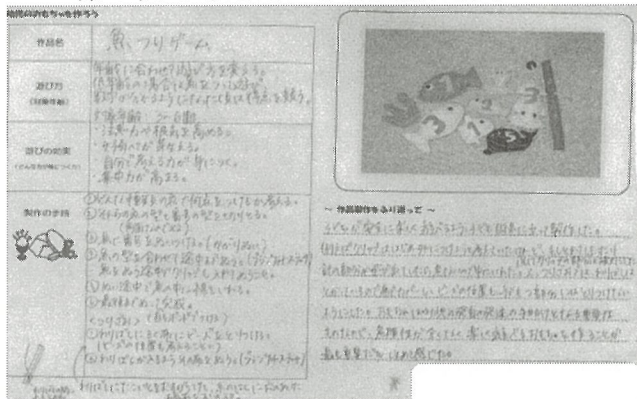


3～5歳対象 集中力・競争力の効果(魚釣りゲーム)

0～1歳対象 野菜の成り立ちを知る
(野菜と友達)

第6次 おもちゃの図案を考える

・第5次で考えたことを実際に行う



3～6歳対象 注意力・好奇心・集中力が身につく (魚つりゲーム)

2歳対象 想像力・自我・自尊心 (お医者さん)

⑥成果と課題

幼児のおもちゃを製作することによって、生徒たちから、最初は、どんなものを作るといいのだろうか悩んでいたみたいだったが、自分たちが子供のころ遊んでいて楽しかったものとか、こんなので遊んだら色々なことが学べるかいろいろアイデアが浮かんできて、与えられるおもちゃでなく、自分たちで工夫し手作りの温かみや愛情を感じることが出来たようだ。

しかし、ここでの実践が、生かされ時がくるのが速いかの遅いのかは、いつになるかはわからないが、現時点で定着している評価は、定かでない。今後は、職場体験や幼児との触れ合う時間を授業でも取り入れ生徒が自分なりの課題をもって、幼児のかかわり方については、対象とする幼児の発達やその時の幼児と触れ合うことのよさに気づくなどの、幼児に対する積極的な関心を得られるようにする。

4. 成果と課題

技術分野・家庭分野ともにこれからの生活に即した内容について、単に技能の習得だけでなく、よりよい生活を実現するために必要な知識や、課題を見出す様々な視点を獲得し、課題解決学習へと結びつけることができた。また、その学習の過程で適切な場面設定を行うことによって、より高い次元での思考が可能となり、これらの実践を通して、技術・家庭科での学校における学習と、家庭や社会における実践との結びつきを深めることができたと思う。

今後の課題としては、より生活に連動し実践することができる課題の提起であったり、生徒自ら課題を模索し解決にむけて取り組めるような授業展開を行ったり、指導と評価の一体化を目指し、評価基準の明示や自己評価を取り入れることで学習意欲の向上を図っていきたい。また、本学池田キャンパスの共同研究のテーマの実現を目指して、3校種での教科連携や、他教科との連携をはかり、より一層系統性・階層性を意識した授業展開を進めていかなければならない。